

ブツダとウパニシャッド

山 本 和 彦

きょう用意してきたのは、「ブツダとウパニシャッド」というタイトルです。仏典というのは、ブツダが全部自分で考えて書いたわけではありません。仏典には、仏教以前のブツダが生まれる前のインドの思想がたくさん出てきます。ウパニシャッド文献に出てくる話と仏典に出てくる話とで同じものがあります。きょうはそれを取り上げて、見ていこうと思います。

まず結論から言います。ブツダはヒンドゥー教の様々な言葉を独自に解釈しており、換骨奪胎の達人です。ウパニシャッド文献での元来の意味を理解しておかないと、仏典での解釈を誤ることになります。たとえば、ヒンドゥー教では梵行（ブラフマチャリヤ）はヴェーダ学習ですが、仏教では清浄行のことです。ヒンドゥー教では「ヴェーダの達人」はヴェーダ聖典に精通している人を意味しますが、ブツダにとっては正見の人のことです。ヒンドゥー教では生まれによって婆羅門（ブラーフmana）となりますが、ブツダは行為によって婆羅門となると言います。ヒンドゥー教では婆羅門は詩を唱えて報酬を得ますが、ブツダは報酬を得てはいけないと言います。ヒンドゥー教では解脱はモークシャ（mokṣa）、ムクティ（mukti）と言われていますが、ブツダはニルヴァーナ（nirvāṇa 涅槃）という言葉をよく使います。ヒンドゥー教ではダルマ（dharma 法）は祭祀行為のことですが、仏教では真理やブツダの言葉のことです。

ヒンドゥー教では動物の供儀を肯定しますが、ブッダは否定します。仏典に見られる「頭が落ちる」という話はウパニシャッド文献からの借用ですが、意味の逆転があります。仏典をそのまま読んで、「ああそういう話があるのか」と理解したつもりでいると、間違うことがあります。ブッダはわざと意味をひっくり返しています。ウパニシャッドを知っていれば、そういうことがわかりますが、知らなかったらわかりません。

しかし人間の目的が「苦の滅」であること、「洞窟」(gūha) や「亀」(kurma) の譬え、師など尊敬する人に右肩をむけて右まわりにまわる丁寧な挨拶である右繞、ブラダクシナ (pradaksina) と言います、という儀礼、「自己が愛しい」という考え、サマーディ (samadhi: 三昧) やドゥヤーナ (dhyana 禅定) というヨーガ (yoga 瞑想) に関する用語などは完全に一致するわけではありませんが、仏教とヒンドゥー教とで共通しています。

今回取り上げるテーマは、「頭が落ちる」という話と洞窟の譬えの話です。テキストの成立年代を資料に書いておきました。仏典やウパニシャッドを読んでも、成立の前後関係を知っておかないと、どちらがどちらに影響を与えたのがわかりません。ブッダが生まれたのは紀元前四六三年で、入滅されたのは紀元前三八三年です。すでにそれ以前に『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』(Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad)、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(Chāndogya Upaniṣad)、『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』(Taittirīya Upaniṣad) などがありましたので、ブッダはおそらくこういうウパニシャッド文献を知っていたということになります。だから仏典を読むときは、仏典からこういうブッダ以前のウパニシャッドの思想を引き算しないと仏教の独自性は見えてきません。どれが仏教の思想なのかを知るうえで、そういう作業は必要なことです。ブッダと同時期にジャイナ教も出てきました。『マハーバータ』(Mahābhārata) は、紀元前四世紀頃から紀元後四世紀頃にかけて徐々に成立します。仏典の中で一番古いのは『スッタニパータ』(Suttaṅgapaṭa) です。その韻文部分は紀元前二六八年以前の成立です。これが一番古いお経です。それと同時代か、もしくは、そのあとにまたウパニシャッドが出てきます。『ムンダカ・ウパニシャッド』

(Munḍaka Upaniṣad)、『カタ・ウパニシャッド』(Kaṭha Upaniṣad)、『シュヴェーターシュヴァッタラ・ウパニシャッド』(Śvetāśvatara Upaniṣad)、それからまだ紀元前ですけれど紀元前二五〇年から紀元前一五〇年頃に『スッタニパータ』の散文部分、それから『ダンマパダ』(Dhammapada)がこの頃に出ています。その後で紀元前後に『マヌ法典』(Mānsmṛiti)、それから『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavadgītā)が成立します。紀元後に『ウダーナヴァルガ』(Udānavarga)や『マイトリー・ウパニシャッド』(Maitri Upaniṣad)などが出てきます。初期の仏典と『ウパニシャッド』の成立というのは年代的に混ざっています。だから仏教とヒンドゥー教は、お互いに影響を与え合っているということがわかります。

『スッタニパータ』の九七六番から一〇三一番までが「頭(mudha)が落ちる(√phad√pad)」という話です。それを紹介します。『スッタニパータ』の和訳は中村元訳『ブッダのことば』(岩波文庫、一九八四)のものです。

『スッタニパータ』

〔九七六〕明呪(ヴェーダ)に通じたバラモン(バーヴァリ)は、無所有の境地を得ようと願って、コーサラ族の美しい都から、南国へとやってきた。

〔九七七〕かれはアッサカとアラカと(両国)中間の地域を流れるゴダーヴァリー河の岸辺(きしべ)に住んでいた、――落穂(おちほ)を拾い木の実(み)を食って。

〔九七八〕その河岸の近くに一つの豊かな村があった。そこから得た収益によってかれは大きな祭りを催(もよお)した。

〔九七九〕かれは、大きな祭りをなし終わって、自分の庵(いおり)にもどった。かれがもどってきたときに、他の一人のバラモンがやってきた。

〔九八〇〕足を傷め(いた)、のどが渇(かわ)き、齒はよごれ、頭は塵(ちり)をあびて、かれは、(庵室の中の)かれ(バーヴァリ)に近

づいて、五百金を乞うた。

〔九八二〕バーヴァリはかれを見て、座席を勧め、かれが快適であるかどうか、健康であるかどうか、をたずね、次のことを述べた。

〔九八二〕「わたくしがもつていた施物はすべて、わたくしが施してしまいました。バラモンよ。どうかおゆるしください。わたくしには五百金がないのです。」

〔九八三〕「わたくしが乞うているのに、あなたが施してくださらないならば、いまから七日の後に、あなたの頭は七つに裂けてしまえ。」

〔九八四〕詐りをもうけた（そのバラモン）は、（呪詛の）作法をして、恐ろしいことを告げた。かれのその（呪詛の）ことを聞いて、バーヴァリは苦しみ悩んだ。

〔九八五〕かれは憂いの矢に中てられて、食物もとらないで、うちしおれた。もはや、心がこのような気持では、心は腹想を楽しまなかった。

〔九八六〕バーヴァリが恐れおのき苦しみ悩んでいるのを見て、（庵室を護る）女神は、かれのなを思つて、かれのもとに近づいて、次のように語つた。

〔九八七〕「かれは頭のことを知っていません。かれは財をほしがっている詐欺者なのです。頭のこと、頭の落ちることも、かれは知ってはいないのです。」

〔九八八〕「では、貴女は知っておられるでしょう。お尋ねしますが、頭のこと、頭の落ちることをも、わたくしに話してください。われらは貴女のおことばを聞きたいのです。」

〔九八九〕「わたしだつてそれを知っていませんよ。それについての知識はわたしにはありません。頭のこと、頭の落ちることも、諸々の勝利者（ブッダ）が見そなわしておられます。」

〔九九〇〕「ではこの地上において頭のことと頭の裂け落ちることを、誰が知っておられるのですか？女神さま。どうかわたしに話してください。」

〔九九一〕「むかしカピラヴァットウの都から出て行つた世界の指導者（ブツダ）がおられます。かれは甘蔗王かんしょうおうの後裔こうえいであり、シヤカ族の子で、世を照らす。

〔九九三〕かの目ざめた人（ブツダ）、尊き師、眼ある人は、世に法を説きたもう。そなたは、かれのもとに赴おもむいて、問いなさい。かれは、そなたにそれを説明するでしょう。」

〔一〇二五〕（アジタがいった、「バーヴァリは頭のことについて、また頭の裂け落ちることについて質問しました。先生！それを説明してください。仙人さま！われらの疑惑を除いてください。」

〔一〇二六〕（ゴータマ・ブツダは答えた）、「無明むみょうが頭であると知れ。明知ちちが信仰おんぎと念いと精神統一と意欲と努力とに結びついて、頭を裂け落させるものである。」

〔一〇二七〕そこで、その学生は大いなる感激をもって狂喜きやうきしつつ、羚羊皮かもしか（の衣）を（はずして）一方の肩にかけて、（尊師）の両足りょうそくに跪ひざまずいて、頭をつけて礼をした。

バーヴァリは、婆羅門に布施ができなかつたので、頭が落ちるとその婆羅門に言われて、苦しんでいました。しかし、ブツダに頭が落ちるとは無明の滅のことであると言われて、バーヴァリが狂喜して終わるといふ話になつています。

以上が、『スッタニパータ』の中での頭が落ちる話です。『ダンマパダ』、『ウダーナヴァルガ』、『テラガーター』(Theragāthā)、『サンユッタニカーヤ』(Sanyuttanikāya)でも同じ話が出てきます。

「頭のこと」については、ウパニシャッドのなかでに次のように言われています。一例だけ挙げておきます。ウパ

ニシャッドの和訳は以下すべて、湯田豊『ウパニシャッド』（大東出版社、二〇〇〇）のものです。

『ムンダカ・ウパニシャッド』

〔二・一・四〕彼の頭は、〔天上にある〕火である。

ここでの「頭」の原語は、ムールダン (murdhan) というサンスクリットです。頭を意味する言葉には、シラス (siras) というサンスクリットもあります。頭が火であるとは、ウパニシャッドを知る人でないとわからないことです。

ゴダーヴァリー川はインド西部のマハーラシュトラ州を水源として、インド東部のベンガル湾までの非常に長い川で、いまもあります。

カピラヴァットウは、ネパールのルンビニーというところにあります。大学のインド研修で毎回行きます。

次に仏典より古いウパニシャッドで、この話がどうなっているのかを見ます。『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』と『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』という最古のウパニシャッド文献のなかでの「頭 (murdhan) が落ちる (vāpat)」という話です。

『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』

〔三・六・一〕ヤージニャヴァルキヤは言った―「カールギーよ！お前の頭が砕け散らないように、問い過ぎるな！まことに、問い過ぎるべきではない神格について、お前は問い過ぎる。カールギーよ！問い過ぎるな！」そこでカールギー・ヴァーチャクナヴィーは沈黙した。

〔三・七・一〕「わたしは、それを知っている。ヤージニヤヴァルキヤよ！もしも、お前が、その糸、および内部にあつてコントロールするものを知らないで、バラモンの牛を駆り立てるならば、お前の頭は碎け散るであらう。」

〔三・九・二六〕「吸い込まれる息と吐き出される息を連結する息において。これが、^ゝそうではない、そうではない、^ゝと言われる自己 (atman) である。それは把握され得ない。なぜなら、それは把握され得ないからである。それ破壊され得ない。なぜなら、それは破壊され得ないからである。それは無執着である。なぜなら、それは執着しないからである。それは繫縛^{けいばく}されていない。それは揺るがない。それは傷つけられない。これが、八つの住居、八つの生活領域、八つの神々、八つの人間である。それらの人間を分離させ、元の状態に戻し、それらを超えて行った人間—について、わたしはお前に尋ねる。もしも、お前がそれをわたしに説明しなければ、お前の頭は碎け散るであらう。」シャーカリヤは、その人間を知らなかった。彼の頭は碎け散った。更に、彼の骨を他のものと見なして、盗賊たちは彼の骨を盗んでしまった。

『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』

〔二・八・六〕「シラカ・シャラーヴァティヤよ！まことに、歌曲は有限である。今、誰かが、^ゝお前の頭は碎け散るであらう」と語れば、お前の頭は碎け散るであらう。」

〔二・八・八〕「ダールピヤよ！まことに、確かに、お前のサーマンの歌曲は基礎づけられていない。今、誰かが、^ゝお前の頭は碎け散るであらう」と語れば、お前の頭は碎け散るであらう」と。

〔二・一〇・九〕「プラストトリよ！もしも、お前が、サーマンの歌曲の前奏曲と結び付けられている神格を知らないでサーマンの歌曲の前奏曲を歌おうとすれば、お前の頭は碎け散るであらう。」

〔一・一〇・一〇、一一、一・一一・四、六、八〕

「お前の頭は砕け散るであろう」と。

〔一・一一・五、七、九〕

「お前の頭は砕け散ったであろう」と。

ウパニシャッド文献のなかでの「頭が落ちる」という話の方が、仏典よりも時代的に先行します。ここでは無知な者の頭は落ちるという内容です。『スッタニパータ』では意味合いが変化しており、無明の滅を意味しています。ブッダがわざと変えたということが、比較することでわかります。

もう一つ、洞窟の譬えを出しておきました。『スッタニパータ』と『ダンマパダ』の中の洞窟の譬えを見てみると、「窟」にカッコして（身体）と書いてあるのは注釈者が窟、洞窟のことをカーヤ（kāya 身体）と注釈しているからです。『スッタニパータ』と『ダンマパダ』のなかでの洞窟（gutta）の譬えです。『ダンマパダ』と『ウダーナヴァルガ』の和訳は中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』（岩波文庫、一九七八）のものです。

『スッタニパータ』

〔七七二〕窟（身体）のうちにとどまり、執著し、多くの（煩惱）に覆われ、迷妄のうちに沈没している人、—
このような人は、実に〈遠ざかり離れること〉（厭離）から遠く隔っている。実に世の中にありながら欲望を捨て去ることは、容易ではないからである。

『ダンマパダ』

〔三七〕心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を制する人々は、死の束

縛からのがれるであろう。

『ウダーナヴァルガ』

〔三一・八A〕心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を制するであろう人々は、大きな恐怖からのがれるであろう。

以上は仏典に出てくる洞窟の譬えです。次はウパニシャッド文献のなかでの洞窟 (gufa) の譬えです。

『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』

〔二・一〕ブラフマンは真理であり、認識であり、無限である。それを空洞に、最高天に隠されていると知っている人―彼は賢明なブラフマンと共に、一切の欲望を達成する。

『ムンダカ・ウパニシャッド』

〔二・一・八〕彼から、七つの生氣、七つの炎、七つの薪、七つの供物、そこにおいて生氣が動く、これらの七つの世界が生じる。心臓の洞穴に、七つずつ、それらは隠されている。

〔二・一・一〇〕この一切は、まさに人間である―それは祭祀の行為であり、禁欲タパスであり、死を超えているブラフマン (brahman) である。これが心臓の洞穴に隠されていることを知っている人―彼は、この世における無知の結び目を断ち切る、愛いとしいものよ！

〔二・二・一〕明らかであって、しかも、隠され、心臓の洞穴を動いている、と言われるもの―それは大いなる場所である。この中に一切は固定されている―動いているもの、息をしているもの、そして瞬いているものは。

〔三・一・七〕それは、遠くより遙かに遠くにあり、しかも、ここ、の近くにあり、まさに、ここで見ている人々の心臓の洞穴に隠されている。

『カタ・ウパニシャッド』

〔一・一四〕無限の世界に到達する手段として、〔その〕基礎としてそれが心臓の洞穴に隠されていることを、お前は知れ！

〔三・一〕良くなされた祭りの行為の世界において真理を飲みながら、心臓の洞穴および最高の、あなたの半分の中に入った双方のもの〔自己〕を、ブラフマンを知っている人々、五火および三重のナチケートスの火壇を所有する人々は、〔それぞれ〕影と光と呼ぶ。

『シュヴェーターシュヴァッタラ・ウパニシャッド』

〔三・二〇〕微細なものよりもっと微細、大いなるものよりもっと大いなる自己は、生きものの心臓の洞穴に置かれている。

『マイトリ・ウパニシャッド』

〔二・六〕まさに、このものは自己自身を五重に分け、心臓の洞穴に隠れていた。〔彼は思考から成り、息を身体とし、光を形態とし、真理を意図とし、虚空を自己としている〕と。まことに、まだ目的を達していない彼は、彼の心臓の内部から考えた―「わたしは事物を楽しんで味わおう」と。

〔七・一一〕右の目に宿っている、この目に見えるプルシア―これがインドラである。そして、彼の妻は左の目に宿っている。二人の会う場所は、心臓の内部の洞穴である。ここにある血の塊りが彼ら二人の熱である。心臓から目にまで達し、目において基礎づけられているチャンネル―それが二人の血管であり、一つではあるけれども二重である。

このウパニシャッドの中での洞窟、空洞、洞穴の譬えを見ると、すべて心臓のことを言っています。アトマンの居所としての心臓のことです。仏典の洞窟について言われているところで言いましたが、『スッタニパータ』七七二の最初のところで、注釈者は「身体」と解釈しています。これは難しいところです。このウパニシャッドの用例からして、もしブッダがウパニシャッドの「洞窟」は「心臓」のことであると知っていて、「洞窟」と使ったとすれば、これは「身体」ではなく「心臓」のことだということになります。しかし仏教独自の使い方として「洞窟」を「心臓」ではなく「身体」として使ったという可能性もあります。こういう細かいことですけど洞窟 (grotto) が何をさすのか、身体 (kaya) を指しているのか、心臓 (indriya) を指しているのかという、そういうことを突き止めることが実は研究です。仏教学とはそういう学問です。非常に細かいことをやります。パッと読んで意味を理解するだけではだめです。本当にどういう意味か、ウパニシャッドの影響がどの程度あるのか、ウパニシャッドを拒否しているのか、受け入れているのか、というのを考えながら仏典を読まないとは本当には仏典は読めないという一例です。

ちよつと新入生の皆さんには難しかったかもしれませんが、大学ではこういう研究をやります。大学四年間で、こういうことをみなさんは勉強します。ただ単に読んで理解するものではありません。文献学として、仏典とヒンドゥー教のテキストとの比較とか、そういうこともやらないと仏教の独自性というのは、なかなかわからないと思います。これで私の話は終わります。